

エルザ・ドルラン著／ファヨル入江容子訳（人文書院、2024年）

人種の母胎 性と植民地問題からみるフランスにおけるナシオンの系譜

伊達 聖伸*

『人種の母胎』という表題には、女性差別が人種差別を胚胎する子宮になったことと、「性」と「人種」のマトリックスが同じ型で析出されたことが含意されている。本書のテーゼは、女性と非白人を対象とする医療言説の権力が西洋の人間〔＝男性〕科学を支えてきたというものである。

第I部「女性たちの病気」では、古代から17世紀の古典主義時代、さらにはそれ以降も、女性の身体が病める身体として表象されてきた歴史が描かれる。ガレノスの四大気質説に基づき、冷たく湿った女性の気質は、熱と乾湿の均衡が保たれた男性よりも不完全とされてきた。宗教も医学も、ともに女性を劣位に置いた。誘惑者イヴの危険性を説く神学と、女性の受動性と冷感症を強調する医学のあいだには齟齬もあったが、セクシュアリティと道徳性において「危険」（76頁）とされた女性は医学でも説明することができた。男性ならば健康の指標であるはずの熱が、女性においては病気の指標とされ、娼婦やアフリカ人女性や女性同性愛者などに割り当てられたからである。女性の冷たく湿った気質が原因とされたヒステリーは、やがてブルジョワ階級に典型的な病とされ、逆に熱を帯びた女性の身体は女性性欲亢進症や不妊症の説明に使われ、階級的には庶民や社会の底辺ないし境界にいる女性の病とされた。

第II部「国民の生成」は、女性の「健康」概念の形成が、女性を「国民」を産む「母」として再定義する過程と相関的であったことを論じている。出産はもともと女性たちの管理下にあったが、16世紀末頃から男性医療従事者が介入するようになると、産婆は魔女と見なされ、助産婦の職務は世俗的な医療制度のなかで再編された。妊娠や出産はしばしば死をもたらす病気として認定されたが、次第に医療言説は、男女間の優劣の秩序を維持したままで、出産を奨励する基準を作り出す。それ

は、女性の病気の大部分は生殖器系の機能の不調に由来するが、リズムが規則的であれば健康というものである。フランス語で月経や生理は「規則」という意味もある語の複数形«*règles*»で言い表わすことができるが、昔からそうだったわけではないのかと思って評者が調べたところ、17世紀末からの用法らしい。18世紀半ば以降、妊娠や出産は病気から健康の世界に移行したが、それはフランス国民を再生産する女性を、病的な「女性ヒステリー症者」（173頁）や黒人女性や奴隷よりも優れた存在と見なす視線と連動していた。

第III部「人種の発明」は、女性差別のモデルが近代的な人種概念に適用されたことを示している。植民地を鏡として国民が作られる過程で、白人の母が国民の母胎となる一方、黒人やアメリカの「インディアン」はいわば「女性化」を通して人種化された。17世紀末の時点では、アフリカ人女性奴隷はマラリアに対する免疫を持つためよい乳母とされていたが、18世紀半ば以降は入植者の子どもが黒人奴隷の乳を吸ってその気質を取り込んでしまうことが懸念され、白人女性による母乳育児が推奨された。医学権力は、黒人の身体が奴隷労働に耐えられることを示す際には男性化し、人種の劣等性を示す際には女性の病気モデルを用いて奴隷制を正当化した。植民地権力は、黒人の力に恐怖を抱きつつ、フランス国民とムラートやクレオールとの差異を強調した。

本書が対象とする時代はおもに17～18世紀で、医療言説の背後に広がる空間は奴隷貿易の舞台であるフランス、アフリカ、カリブ海地域だが、その示唆の射程は広くて長い。以下、評者の関心に引きつけて、3つほど論点を展開しておきたい。

第1に、両アメリカ大陸におけるフランスの植民地の比較である。本書第III部で触れられているように、フランスの植民地の農園では黒人奴

* 東京大学大学院総合文化研究科教授

隷とヨーロッパの年季奉公人がほぼ同数だったが、17世紀末になると奴隷の割合が増えた。白人入植者と黒人奴隷の婚姻や子どもたちの条件を規定した1685年の「黒人法典」にも関わる論点だが¹、行政官や入植者は白人女性たちを求めた。そうして植民地に送り込まれたのは、「精神異常者」や「乞食」を収容していた病院から集められた女性だった(338頁)。道徳性に問題ありとされていた彼女たちは、大西洋を渡ることによって美德を備えた貞淑な女性に変貌した。それは、黒人女性が不道徳な役回りを引き受けて、白人女性の潔白を際立たせる機能を果たしたからである。この漂白作用を、ケベックと比較するとどうなるだろうか。北米のヌーヴェル・フランスでは、毛皮貿易などに従事する男性入植者が多く、女性の数が極端に少なかったため、1663年から1673年にかけて、ルイ14世の支援を受けた約800人の「国王の娘たち」(Filles du Roi) が送り込まれた。彼女たちの多くも孤児院などで育った貧困層の出身だったと言われているが、目的地がケベックかカリブかによって選定基準に違いがあったのか。植民地での生活や子孫たちの社会的地位はいかなるものだったのか。比較研究はほとんど聞かない。

第2に、19世紀絵画の女性表象である。本書は、17世紀に発見された女性の健康がたくましい農村女性をモデルとしていたことを指摘している(130頁)。連想したのは、19世紀の農民画が過酷な労働の現実を捨象して素朴で敬虔な女性を描く傾向を持ち、また田舎という自然の懷に抱かれた若くて健康な農婦に対する都会の男性の欲望がしばしば投影されていることである²。よく知られているように、マネ《草上の昼食》(1863年) がスキャンダルを巻き起こしたのは、従来は神話の世界と結びつけられていた女性の裸体画を、同時代の西洋のブルジョワの世界に持ち込んで描いたからだ、男性が裸の女性の歯を検査している場面を描いたジャン＝ルイ・ジェロームの《奴隷市場》(1866年) が問題視されなかったのは、中東という植民地空間の女性表象だったからで、こうした点も女性と人種の相関関係から読み解く必要がある。

第3に、現代フランスのムスリム女性である。20世紀後半以降、科学の装いを凝らした生物学的人種概念はタブーとなったが、文化的人種差別に姿を変えて存続している。諸宗教を平等に遇するはずのライシテが、イスラームに対して差別的な形で現われる面もあることは否定できず、しかもヴェール問題が注目を集める傾向は女性の身体の管理という関心の継続を示唆している。医療言説が魔女やヒステリー患者を周縁化してきたように、現在支配的なライシテ言説がムスリム女性を焦点とする権力として作用しているならば、「人種」の母胎はライシテ体制下の「宗教」の母胎にもなったと言えよう。そもそも本書は2000年代のヴェール問題のなかで書かれた書物であり、著者は権力関係の交差性と複合的な差別を分析する「インターセクショナリティ」の概念をフランスに導入した者の一人である。本書の背景あるいは延長線上にヴェール問題があることは、「訳者解説」でも指摘されている(383頁)。

権力の狡知というものがあるとすれば、それは被支配層に充満していく不満が支配層に向かって暴発しないよう、被支配層間で敵意が処理されるように仕向けることである。17世紀の植民地の農園では、年季奉公人の不満は経営者に対してではなく奴隷へと向かった(336頁)。しかし、カリブの島の奥地に身を潜めた原住民と奴隷が連帯し、共通の敵である白人に立ち向かったエピソードで本書は結ばれている。人種の母胎は、言説を通じた支配という構造を生んだが、そうした支配体制に亀裂を入れる小さな者たちの歴史^{イストワール}＝物語をも生む可能性を孕んでいる。

注

- 1 ルイ・サラ＝モランス『黒人法典——フランス黒人奴隷制の法的虚無』(中村隆之・森元庸介訳、明石書店、2024年)も本訳書と前後して刊行されている。
- 2 馬淵明子「描かれた農婦——一九世紀フランスの農民画における主題をめぐって」鈴木杜幾子・馬淵明子・池田忍・金恵信編『交差する視線——美術とジェンダー2』ブリュッケ、2005年。